

歴史と忘却：反=歴史的小説としての『最初の人間』

千々岩，靖子
青山学院大学非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/21023>

出版情報：Stella. 30, pp.281-299, 2011-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



歴史と忘却

——反＝歴史小説としての『最初の人間』——

千々岩 靖 子

カミュの遺稿『最初の人間』は、紆余曲折の後、作家の死後約 30 年経た 1994 年によく日を見ることとなる。この草稿は未完成の作品であることを強調するために、1971 年以来刊行されてきた資料集「カイエ・アルベール・カミュ」シリーズの一環として出版され、その後 2000 年にはガリマールの「フォリオ」叢書に収められた。さらに 2008 年には新資料とともにブレイアッド版『アルベール・カミュ全集』第 4 巻にも収録された。

遅れてきた「新作」として注目を集めたこの小説は、なによりもまず「私の源泉」[I, 32]¹⁾と作家自身が称した、『裏と表』(1937)に代表される初期作品²⁾への「原点回帰」であると考えられた。その証左として引用されるのが、『最初の人間』構想時期に書かれた 1958 年版『裏と表』序文の一節である——「ひとつの言語を築きあげ、神話を生かすための多くの努力にもかかわらず、もしいつか『裏と表』をふたたび書くことができれば、私は決して何ものにも到達しないだろう」[I, 38]。とすると、高塚浩由樹も指摘するように、カミュの文学的行程は、最終的に「源泉」に回帰する点において円環構造をなすと言える³⁾。

たしかに自伝的小説である『最初の人間』は、同じく作家の幼少期の思い出を主な題材とした『裏と表』の世界にふたたび舞い戻ったような印象を与える。だが他方で、テーマや形式にかんして新たな試みも見られ、作家の並々ならぬ文学的野心を認めることができる。何よりも注目すべきは、カミュの文学作品としては初めて「歴史」の位相が導入され、年代記的な厚みと広がりが付与されている点であろう。アニエス・スピケルが指摘するように、カミュは、トルストイの『戦争と平和』を範に仰いだ壮大な「歴史小説」の執筆を目論んでいたのだ⁴⁾。そこで本稿では、『最初の人間』における歴史記述の問題にかんして

若干の考察を試みたい。

＊

『最初の人間』を『裏と表』を中心とする初期の自伝的作品と比較した時、その違いとして第一に挙げられるのが日付記述の有無であろう。習作期のカミュが少年期の回想を通じて繰り返し描いたのは、日常の時間から逸脱する特権的瞬間であった。とりわけ「ウイとノンのあいだ」(『裏と表』収録)で回想される、夕闇のなか沈黙する母の情景は、「永遠のなかで停止した一瞬」[I, 47]として息子の心に刻まれている。したがって作品に日付の記述はない。他方で主人公ジャック・コルムリイの誕生を語る『最初の人間』冒頭部では、「1913年秋のある晩のことだった」[43]と古典的小説作法によりながら現実の時間が明示され、それにより次章冒頭の「40年後」[751]についても1953年という具体的な時期を特定できるよう構成されている。このような歴史的時間の記載はカミュの小説作品には稀であった。

じじつ『最初の人間』に至るまでの小説作品を振り返ると、レヴィ＝ヴァランシが指摘するように⁵⁾、作家は歴史的・時代的なレフェランスを排除した世界を常に意識的に構築してきた。『異邦人』(1942)にかんしては、あらためて指摘するまでもあるまい。ナチスによるフランス占領を寓話化した『ペスト』では、冒頭で「194*年」[II, 35]という歴史的時間が示されるものの、正確な年号までは記されていない。カミュは年号の記述で疫病＝ナチスと示唆するが、作品はその射程においてのみ読まれるものではない。したがって、作家自身が主張したように[II, 286]、単に歴史的事件を象徴的に描いた物語とすることはできない。サルトルとの論争を色濃く反映した『転落』(1956)、および短編集『追放と王国』(1957)にかんしても、執筆当時の1950年代を背景にしていると推測できるが、年代や日付は正確に示されないままだ。やはり『最初の人間』における時間記載の特異性は否定できないのである。

歴史的時間の挿入、歴史的イベントへの言及といった『最初の人間』に見られる新しさは、初期の自伝的作品ではほぼ不在の者として扱われていた「父」に焦点があてられることで可能になっている。「父の探索」と題された第1部は、40歳のジャックが、生後すぐにマルヌの戦いで戦死した顔も知らない父の痕跡を

迫る物語である。そしてこの探索を通じて、主人公は自分自身の過去、家族の過去、そしてアルジェリアのフランス人という集団の歴史へと思いを馳せる。小説は、主人公の誕生から成長までをたどる自己形成の過程の物語にとどまらぬ、家族と祖先をめぐる年代記としての様相を呈するのである。

だが父の探索によって明らかにされる過去は両義的だ。父の生を再現しようとの試みは不毛に終わるものの、他方で約1世紀にわたる植民者の歴史が明らかになっていく。第1部では、「過去の忘却」という事実と、過去を明るみにしようとする主人公の葛藤が物語の推進力となり、歴史をもたない人々の歴史、歴史のない土地の歴史を叙述するという、小説の矛盾した構造を形成するのである。

まず父の探索を通じて明るみにでるジャックの家族、アルジェリアのフランス人、アルジェリアの人々へと連なる「過去のない」種族の系譜を辿っておこう。見知らぬ父の痕跡をたどろうと決心した主人公は、まずアルジェに帰省して母と叔父から証言を得ることを試みる。だが、ふたりの記憶は曖昧なものでしかなかった。その理由として第一に挙げられるのが言葉の欠如である。初期の自伝的作品でも、母と叔父の聴覚と言語能力に問題があることが言及されているが⁶⁾、『最初の人間』ではこの点が詳述され、さらに祖母も非識字者であることが記されている[783/865]。とりわけ重要なのは、父自身が寡黙であったという事実である[778/787/854]⁷⁾。父は自分の姿を後世に伝えるに足る言葉を十分に持っておらず、生前の父を知る家族も伝達手段としての言語を有していない。過去は二重に封印されているのである。

そして過去が忘却されるもうひとつの理由が貧困である。プルーストになぞらえながら、語り手は以下のように述べる——「失われた時が蘇るのは裕福な者のうちでしかない。貧者にとって、失われた時はただ死に向う航跡のぼんやりとした痕跡をしるすだけである」[788]。貧者は裕福な人たちのように旅行をすることもなく、同じ労働を繰り返す日々を過ごすため、空間と時間の両方において「指標」を持たない。そして、肉体労働による疲労ゆえに過去は忘れ去られてしまうのだ——

彼の母も叔父も亡くなった親類のことはもう口に出さなかった。ジャックがその痕跡を辿ろうとしている父のことも、他の誰のことも。[...] そして、黙って背中を丸めな

がら、思い出もなく、ただいくつかの定かならぬイマージュに忠実なままジャックを囲んでいるこのふたりは、いまや死に近いところ、つまり常に現在を生きていた。彼は父親がどんな人であったかを、彼らから知ることはけっしてないだろう。[822]

ジャックは父の手掛かりを探すために自身の生誕地モンドヴィを訪れている。そこでも父に関わる情報をほとんど得ることができず、父の探索は早くも暗礁に乗り上げる。ジャックが生まれたサン＝タポートル農園の跡地に住む農場主、ヴェイヤールは以下のように言う——「ここでは保存しないのです。壊して、作り直すのです。みんな未来のことを考え、あとのことは忘れてしまうのです」。ヴェイヤールは意味深長な発言をする——「もう少し後だったら、ここで何も見つけられなかったかも知れません」[850]。ジャックのモンドヴィ訪問が語られる第7章に明確な日付の記述はないが、アルジェリアの独立が濃厚になってきた執筆当時（1959年）の歴史的状況を反映していることは明らかである。章冒頭で、主人公がボヌからモンドヴィに向う途中で見かける「銃をいっぱい突き立て、ゆっくり走っていた何台ものジープ」[849]は、村の不穏な空気を伝えている。ヴェイヤールの言葉は、情勢悪化のため多くのフランス人がすでに土地を去ったことを意味しているのだ。主人公は最後にモンドヴィにある入植者の墓を訪れるが、「土とほとんど一体になってしまった古い墓石の文字は読み取れなくなっていた」[859]。

ジャックが父の探索の果てに見出したのは、約1世紀以上に渡ってヨーロッパの様々な場所からやってきた入植者たちが、跡形もなく姿を消してしまった事実であった。そしてこの「巨大な忘却」こそが、「父の種族の人間たちの最終的祖国」であることを理解する——

ここでは誰もが見いだされ、見失われた子供であり、東の間の都市を建設し、最終的には、彼ら自身のうちでもまた他の者にとっても永久に死んでしまうのだ。あたかも人間の歴史、ほとんどなにも痕跡を残さぬままに、その最も古い土地のひとつの上で絶えず歩み続けてきたこの歴史が、本当に歴史を作った人々の記憶とともに、絶え間ない太陽のもとで蒸発してしまったかのように。そしてこの歴史は、暴力と殺人の危機の連続、憎悪の炎、この土地のワジ〔砂漠地帯の水なし川〕のように、すぐにあふれて乾いてしまう血のほとばしりだけからなる歴史であった。[...] いや、ジャックは決して父を知ることはないだろう。父はあそこで永久に灰のなかで面影を失い、眠り続けることだろう。[860]

引用中の「ここ」、そして「最も古い土地のひとつ」は、アルジェリアを指す。主人公の家族や当地のフランス人に共通する「過去の忘却」は、壮大な時間的・空間的広がりをもったアルジェリアにまで拡大され、そこは「忘却の土地」と称される。暴力と憎しみで織りなされた血なまぐさい歴史、そして強烈な太陽の下で跡形もなくなってしまう「歴史なき歴史」をつくる「人間たち」とは、はるか昔からこの土地に往来し、そして消えていった諸帝国・諸民族の人間たちをも含んでいよう。

第1部の最後には「名のない家族」「名もない死者」[860]といった言葉が頻出するが、これらをすべて包み込むアルジェリアの無名性は、小説冒頭の風景描写に呼応している――

北側を沸き立つ海によって、南側を凝固した波状の砂で守られたこの一種の巨大な島の上を何千キロも旅をした後、何千年ものあいだにさまざまな帝国や民族が通り過ぎていったのよりほんのわずかに早く飛びながら、雲はこの名もなき地方にさしかかると、そのうちのいくつかは勢いが衰えて、もう大粒の雨となって、四人の旅行者の上のシートの幌を間遠に叩き始めた。[741]

冒頭の風景描写にかんして作家は、「地学的無名性を付け加えること」と稿の欄外に書き込んでいる。引用中の「名もなき地方」は、のちに「ボージュ」、「ソルフェリーノ」と限定される [743-734]。だがこの「何千キロ」という空間、「何千年」という時間幅をもつ「海と砂漠に囲まれた巨大な島」⁸⁾は、第1部の結末同様、名指しされないままだ。この土地に生きる人間が歴史に痕跡を残さない、忘却を定められた「名もない人間」であるように、アルジェリアもまた匿名性を保持しつつづけている。第1部は「無名の土地」に始まり、「無名の土地」で終るのだ。

この小説ではじめて取り入れられた「父」というテーマは、結局「父の不在」を証明して終わる。主人公は戦争孤児として育ったが、父もまた孤児院出身であるため父方の系譜を辿ることができない。せいぜい祖父母がアルザス出身であることが言及されているだけである。父系にかんする情報がわずかであるのに対し、スペインはマオン島出身の母系については第6章で比較的詳しい記述がなされている。だが、母方の祖先たちも「学校から離れたところで繁殖し、ただ獐猛な太陽のもとでへとへとに疲れる労働に従事していた文盲の大家族」

[790] でしかない。こうした家族の歴史は、第2部でリセの友人として登場するフランス出身のディディエに比べるとほとんど無に等しい。中産階級である彼の家には、代々続く家族の手紙や写真が多数保存され、存在の根となる祖先と「祖国＝フランス」の歴史を背後に感じさせる。他方で貧困のなかで育ち、語るべき家系のない「忘却の土地」の生れであるジャックは、ディディエを「自分とは違う人間」[867] だと感じている。

このように、「父の探索」の帰結となる「父の不在」は、過去・伝統・歴史・祖先・祖国・神といった「父なるもの」の不在でもある。タイトルの「最初の人間」とは、依るべき既存の規範を持たず、ゼロから出発する人間を意味する。それゆえ個々の生はそれ自体で閉じられ、伝統や歴史を形成することがない。こうした生の営みは、循環する自然と様々な帝国の勃興が織りなすアルジェリアの「歴史なき歴史」とも共鳴している。エッセー集『結婚』(1939)において、チパザやジェミラといった古代ローマの遺跡が長い時を経て自然に還り、無名の廃墟になってしまったように、かつての入植者たちの墓石も最終的には自然の一部と化す。現在を過去の帰結とみなす歴史的決定論とは無縁な、カミュのアルジェリアにかんする歴史観は『最初の人間』においても継続しているのだ。

*

前節で検討した「過去の忘却」という事実は、他方でジャックによる「過去の忘却からの救済」という反発を引き起こし、両者の葛藤が物語展開の推進力となっていることはすでに述べた。ではジャックによって救い出される「過去の歴史」とはどのようなものなのだろうか。

『最初の人間』で描かれるアルジェリアのフランス人像は、それまでのエッセーで描かれていた「過去のない民衆」[I, 124] 像とほぼ同じである。小学校での決闘の儀式、海水浴の喜び、道徳や宗教の不在、母に対する尊敬と愛情、アラブ人とフランス人の諍いごと、その際の住民たちの警官嫌いなど、詩情豊かに描き出されるアルジェの生活は、「アルジェの夏」(『結婚』収録)をより詳細に再現したものと言ってよい。ただし「アルジェの夏」では、「現時の称揚」を表現するために、住民たちが歴史的文脈から切り離されて語られるが、『最初の人間』では、歴史的文脈に引き入れられるのだ。

この歴史的文脈とはフランス・ヨーロッパの歴史である。そもそも「遊牧民」[937]にも喩えられ、共有する過去や伝統のない人々の「歴史なき歴史」を共同体内部からは描きえない。外部に位置するより大きな「歴史」に回収されてはじめて、これらの人々の「歴史」を語ることができるだろう。『最初の人間』では、歴史的視点を持つジャックが、内部の証言をもとに想像力と連想によって断片的ながらも過去を再構築しようとする。

例えば歴史的観念を持たない母の証言は、ジャックによって公の記憶のなかに組み入れられる。父が戦った第1次モロッコ事件についての母の証言は、「あの人はモロッコで戦った」[778]というわずかな言葉のみである。またマルヌの戦いにかんして、母は「それから戦争があった。あの人は死んでしまった。私に砲弾のかけらが送られてきた」という言葉を発するのみであり、いつ、どこで行われたどの戦争なのか、そしてどのようにして父が死んだのかは全くわからない。母が語る父のエピソードのほとんどは、彼女の記憶の曖昧さのために正確にいつのことなのか不明なままである。しかしながら、これらの戦争は公に記憶されている出来事であるがゆえに、例外的に歴史的時間のなかに位置づけられる。

父がズアール兵として戦った2つの戦争のうち、より重点が置かれているのは第1次世界大戦である。ジャックの子供時代の回想には、終わって間もない大戦の痕跡がいたるところに染み付いている。例えば大戦の生き残り兵士であった小学校教師ジェルマンは、子供たちに自分の戦争体験を語り、大戦の砲火にさらされた兵士たちの姿をルポルタージュ風に描いたロラン・ドルジュレスの『木の十字架』を朗読する。またある時は、エチエンヌ叔父の友人ダニエルが自身の戦争体験を語る⁹⁾。第1次世界大戦は「みんなが口にしていた戦争」[831]なのだ。リセ入学後も、ジャックは友人ピエールと一緒に「傷痍軍人センター」に遊びに行くのだが、ふたりの少年は、手足を無くした元兵士たちを見ても、「戦争はまさに彼らの世界の一部をなしていた」[886]ので驚くこともない。ところで第1次世界大戦の記述にかんし特筆すべきは、歴史や地理の知識をもたない母がどのように大戦を捉えていたかを説明する記述に、最も多くのページが割かれていることである――

〔フランスには〕アルザスと呼ばれる地方があり、彼女の夫の両親は、もうずいぶん昔

になるが、ドイツ人と呼ばれる敵から逃れてアルジェリアに住みついたのだった。今度もまた同じ敵からその地方を取り返さなければならなかったのだが、その敵は特にフランス人に対しては、なんの理由もなくいつも意地悪で残酷だった。[780]

彼女は「アルザス」と「ドイツ人」という言葉をかろうじて認識できるのみで、「呼ばれている」という形容辞が示すようにその知識は曖昧である。フランス史を知る者ならば、上記引用が具体的に何を意味しているのかわかるだろう。引用中の「ずいぶん昔」は普仏戦争を指す。敗戦によりアルザス・ロレーヌ地方はドイツ（プロシア）の占領下に入ったため、ジャックの父方祖父母はアルジェリアへと移住したのだ¹⁰⁾。そしてフランスにとっての第1次世界大戦が、アルザス・ロレーヌ奪還のための対独復讐戦でもあったことは歴史が示す通り。だが世界情勢を知らない母にとっては、長年続いたドイツのフランスに対する敵意は「理由なきもの」でしかないのだ。

同じ場面で、「オーストリア＝ハンガリー」「セルビア」「ロシア」「英国」「大公」「サラエボ」といった大戦にかんするキーワードが並べられるが、それはジャックの母には理解しえない「難しい名前」[781]として一刀両断に切り捨てられてしまう。以下の記述は、母にとっての第1次世界大戦を端的に表現している――

戦争はそこにあった。空いっばいに広がるのを防ぎえない、漠然とした大きな脅威をはらんだ暗雲のように。それはアルジェリアの高原に襲いかかり、多大な被害をもたらすイナゴの来襲や嵐を防ぐことができないのと同じだった。ドイツ人たちは、またもやフランスに戦争を強いていた。そしてまた苦しみが始まろうとしていた――それには理由がなかった。彼女はフランスの歴史を知らなかったし、歴史が何かも知らなかった。[781、強調引用者]

「歴史」を知らない母にとっては、戦争は突然やって来る天災と何ら変わらない。これは、第2次世界大戦という人災を天災に置き換えたことで、ボーヴォワールやロラン・バルトらの批判を浴びた『ペスト』の場合と同じ図式ではないだろうか¹¹⁾。同作において、疫病は前触れもなしに発生し、そして消え去り、ペスト菌が再発生する可能性が示唆されるところで物語は終わりを告げる。『最初の人間』でも事情は同様で、「またもや」という言葉が、第1次世界大戦が単なる「繰り返し」であることを示している。母にとっては普仏戦争、第1次モ

ロッコ事件、第1次世界大戦という区別は存在せず、すべては常に不幸をもたらす同じ「戦争」でしかないのだ¹²⁾。

戦争の捉え方という点にかんして、『最初の人間』と『ペスト』は上記のような共通点をみせるが、大きく異なる点もある。バルトが批判したように、『ペスト』で描かれたのは、他の場所や過去との関連性、すなわち因果律の欠けた完全なる閉塞状態であった¹³⁾。一方、『最初の人間』では、すでに述べたように、因果関係によって説明可能なヨーロッパの歴史の大きな流れが一旦読者に提示されながらも、それが母の「歴史の無知」によって無効化されているのだ。このような歴史記述のあり方に、「史的唯物論の名のもとに」¹⁴⁾『ペスト』の「反歴史性」を批判したバルトに対するカミュなりの返答を見出すこともできよう。

系譜をなすことのない主人公の祖先たちは、第1部の最後で1848年以後の植民者の歴史に接ぎ木されることになる。すでに述べたように主人公のモンドヴィ訪問は不毛に終わったが、かつてソルフェリーノ村を建設した入植者についての証言をヴェイヤールと老医師から得ることになる。ふたりの証言は直接語られるのではなく、アルジェへと帰る飛行機のなかでジャックが回想するというかたちで描かれる。機中、ジャックはモンドヴィで得た情報を整理しようとするのだが、すぐに眠気に襲われ、回想は連想に次ぐ連想というかたちをとる。この場面では、旅のわずか数時間のあいだに、百年以上にもわたる植民者の歴史が凝縮されて描かれるのだ。

回想の主軸となるのは、パリからアルジェリアへと移住し、モンドヴィを建設した1848年の植民団の話である。まずジャック自身の既知の情報として、モンドヴィが「1848年の革命家たち」[854]が建設した開拓村であることが提示されている。そしてヴェイヤールは、開拓者であった自身の曾祖父母の話を語り出す――

パリにはたくさんの失業者がいて、不穏な動きがあったので、憲法制定議会は植民団を送るために5,000万フランの予算を議決した。各人に対して2から10ヘクタールの居住地が約束された。[857]

ここでは簡単な補足が必要だろう。ブルジョワジーと労働者が結束した2月革命後は臨時政府の成立を見たが、経済状況は好転せず失業者は増える一方であった。その結果、労働者の不満が爆発したのが6月暴動である。事件はブル

ジョワジーとプロレタリアの最初の階級闘争として位置づけられるが、前者が主導する共和国政府による弾圧をもって幕を閉じる。その後、政府が労働者問題を解決するための格好の場として目を付けたのが、1848年に併合したばかりのアルジェリアであった¹⁵⁾。引用中の植民事業にかんする議会決定は、パリの社会秩序を乱し続ける危険な貧民たちを一掃する目的で行われたのである。

『最初の間』では、入植者たちが1854年に最初の家を建てるまでの苛酷な開拓史が語られる。パリからセーヌ川を下っていく船、マルセイユからアルジェリアへと向かう「ラブラドル号」、冬の嵐、アルジェリアの道なき道を進み、ようやく到着した何もない荒れ地、セイブーズ河の氾濫、バラックの建設、コレラの発生と流行、ライオンやアラブ人の襲撃など、農業経験のないパリの労働者たちが直面した様々な困難が語られる。だが結局のところ、「移民の3分の2は、アルジェリア中がそうであるように、つるはしにも鋤にも触ることなく死んだ」[857]。ここで、多くの入植者たちが一代限りで終わり、系譜をなすことがない歴史的理屈が示されている。小説では48年の植民団の記述しかないが、「補遺」にはそれ以前の植民についての覚書も書き留められている——「1831年に送り込まれた600人の入植者のうち、150人はテントの下で死んだ。アルジェリアにおける孤児の多さはそのことに起因する」[918]¹⁶⁾。

こうした入植者たちに、ジャックの父親、母方先祖であるマオンのスペイン人たち、父方祖父母であるアルザスの人々、そして主人公がモンドヴィで見かけたアルジェリアのフランス人たち、というように、「現在」に至るまでの入植者たちの姿が次々と重ね合わされていく。系譜や伝統を形成することのない人々が、主人公の想像力により、同一の「種族」として描き出されるのだ。彼らを結びつける観点は様々だ。例えばジャックの父と48年の植民団の人々は、ともにボースからモンドヴィまで同じ道を辿っただけでなく、「遠くの見知らぬ土地」で死んだという点で共通している。それまで見たこともなかったフランスに渡航した後にマルヌで戦死した父に対し、植民団は未知なる土地アルジェリアへと船で渡り、そして死んだのだ。

また、48年の植民団と父方祖父母のアルザスの人々は、ともに「被迫害者かつ迫害者 persécutés-persécuteurs」[858]として描かれる。先程述べたように、モンドヴィは48年の革命家たちによって建設されたとあるが、彼らはフランスでは「被迫害者」ではあっても、アルジェリアでは「原住民」を追い立てる「迫

害者」へと立場が逆転する。このことはアルザスの人々についても当てはまる――

そして彼ら〔アルザスの人々〕には、殺害され、投獄された71年の反乱者たちの土地が与えられた。反抗者たちは、反乱者たちが去ったばかりの土地を奪い取った。[858]

引用文中の「71年の反乱者たち」とは、1871年にアルジェリアのカビール地方で蜂起した叛徒たちを指す。普仏戦争におけるフランスの敗北に乗じた「原住民」による武装蜂起は、最終的にフランス軍によって鎮圧され、結果「原住民」の多くの土地が没収された。この土地が、ドイツによる支配を拒否し、アルジェリアへと移住したアルザス・ロレーヌの「反抗者たち」に与えられたのだ。このように、異なる時代の人々や事件を共通のイメージによって連結することこそが、カミュの歴史記述における特質と言えるだろう。

また、小説で言及される数々の戦争についても、固有の事件名が挙げられることはなく、一括して「戦争」と呼ばれている。ジャックの母にとっての第1次世界大戦が繰り返される「戦争」のひとつにすぎないことはすでに述べたが、この視点は小説全体をも支配している。例えば第7章では、物語の現在時において、ヴェイヤーは友人タムザルの家のドアがなかなか開かないことに対して、「戦争なんですから」[853]とジャックに説明する。また、モンドヴィ入植当初の昔話のひとつとして、フランス人の妊婦が「原住民」に襲われて、下腹部を切り開かれ乳房が切り取られた事件が語られるが、ヴェイヤーは「戦争だったからな」[858]と同じ言葉を用いている。物語の現在時で示唆されるアルジェリア独立戦争の混乱と、かつての「原住民」と「入植者」との争いがともに「戦争」という言葉であらわされているのだ。続いて老医師は語る――

公正にいこう、と老医師は付け加えた。アラブの一族郎党を洞窟に押し込んで、そうだ、そうだ、最初のベルベル人たちの睾丸を切り取ったのは入植者の方なんだ。そしてベルベル人もまた……だから最初の犯罪者に遡る。そいつはカインと呼ばれていた。そしてそれ以来戦争だ。人間とはおそろしいものだよ、とりわけ獐猛な太陽のもとでは。[858]

こうして戦争の起源はカインとアベルの説話まで遡る。睾丸を切り取るというモチーフは、第1次モロッコ事件の回想場面にも見られ[779]、第7章でもヴェ

イヤールの口から語られる [852]。人間ははるか昔から互いに殺し殺されながら生を営み、「反抗者」は「抑圧者」に、「抑圧者」は「反抗者」へと変貌する。必然的に善悪の判断は無効となり、すべては繰り返しとなる。次々とアルジェリアにやって来ては消えて行った入植者の群れと同じように、「いつも同じ人間」[856]の歩みであり、「いつも同じ展開」[854]なのだ。

＊

カミュが『最初の人間』によって、フランスの歴史や植民地史でもスポットライトを浴びることのない、「棄民」ともいえるアルジェリアの貧しい植民者を歴史の流れのなかに位置づけようとしていたことは疑いえない。じじつ「補遺」には以下のような覚書が書き留められている——「歴史から跡形もなく消え去ってしまう貧者の定めからこの貧しい家族を引き離すこと」[930]。執筆動機という点で言えば、この小説は、歴史的時間からの逸脱を指向した初期の自伝的作品とは正反対でさえある。

とはいえ前節で検討したように、カミュは「歴史」を小説に取り込むにあたって、それぞれの出来事の関連性を説明したり、歴史の法則を解明しようとはしない。むしろ主人公の自由な連想を通し、異なる時代の出来事や人々を関連づけることで、時間的な前後関係を錯綜させようとするのだ。さらに第1部4章冒頭のプルースト的な過去の想起——アフリカへと向かう船のなかでジャックはうたたねし、半睡眠状態のなかで自身の過去へと舞い戻る——は、かつての「ウイとノンのあいだ」の冒頭を思わせる¹⁷⁾。このような記述は、やはり作家が抱き続けてきた「非歴史的時間」への嗜好を示しているのではないだろうか。

フィリップ・ルジュンヌに依拠しつつ、自伝という視点から『最初の人間』を分析した稲田晴年は、虚構世界を創造しようとする「意志」と、自身の過去に浸ろうとする「欲望」との葛藤によって小説が成立していることを指摘している¹⁸⁾。この相反する欲求の並存は、作品を歴史性の観点から考察した場合にも当てはまる。「伝統的な」小説技法を踏襲し、明確な時代設定とともに全知の話者が語り出す冒頭部は、「物語＝歴史」構築への意志を明示している。だが事態はすぐさま変わる。父の墓を目にし、自分が彼よりも年上であることにショックを受けたジャックについて、語り手は次のように述べる——「年月は河口に

向かって流れる大河のような秩序をもつことをやめてしまった。それはくだける波、渦巻きでしかなく、そのなかでジャック・コルムリイは、今や不安と哀れみの情にとらわれて、もがいているのであった」[754]。主人公の誕生と成長を描くビルドゥングスロマンとしてこの小説を読んだ場合、あたかも時系列にしたがって物語が進行しているような印象を受ける。だが実際には時期の異なる出来事が主人公の連想によって結ばれているため、それぞれのエピソードの日付を特定したり、全体の年譜を正確に作成することは不可能と言わざるをえない¹⁹⁾。『最初の人間』とは、「歴史」を取り入れようとする作家の「意志」と、「歴史」を非歴史的なものへと引き戻そうとする「欲望」の絶えざる拮抗を描いた作品なのだ。

その具体例を挙げよう。第1部の末尾で、ラブラドル号に乗船した48年の植民団は、冬の嵐のため散々な目にあいながらも、ようやくボースの港に到着する。そこで一旦植民団の話は中断し、語りは現在時に戻る――

ジャックは座席で寝返りをうった。うとうとしていたのであった。ジャックは一度も見たことがなく、背丈さえも知らない父を見ていた。船旅で無事に残った貧相な家具がウインチでおろされ、紛失した家具を巡って悶着が起きているあいだ、ボースの栈橋で移民たちに囲まれている父の姿を見ていた。父は断固たる、陰鬱な様子で、歯を食いしばってそこにいた。そして結局のところ、40年近く前、二輪馬車に乗って同じ秋空の下で、父はボースからソルフェリーノまで同じ道を辿ったのではなかったか？
[855-856]

パリからアルジェリアへと向かう船のなかで、半睡眠状態が主人公を過去の回想へと誘ったように、ここでも「うたたね」は時間秩序を混乱させる装置として機能している。上記場面では父を囲んでいる移民たちは、48年の植民団の人々である。ここで主人公の想像を介して、時代の異なる父と移民が、まるで同じ時と場所を共有するかのように描かれる。だがその直後に「40年前」という言葉が付け加えられることで、父は移民と切り離され、ふたたび正しい時間(1913年)に据えられる。こうしてカミュは一方で登場人物たちを歴史的な文脈に位置づけようとしながらも、他方で彼らをそこから解放し、非歴史的次元へと移行させる。小説はこのような往復運動によって支えられているのだ。

歴史性と非歴史性の葛藤は主人公の二重性にも反映されている。ジャックは

父の探索の果てに、自らもまたアルジェリアの巨大な忘却に飲み込まれ、痕跡を残さず歴史から消えていく「種族」の一員であることを悟るに至る。だが同時に、家族やアルジェリアの人々とは逆に、過去を忘却から救い出そうとするジャックは、やはり彼らとは「異質な」人間なのではないだろうか。この二重化したアイデンティティをよく表しているのが、第1部末尾の記述である――

ジャックはサン＝ブリューにある小さな墓地のことを考えていた。そこにある兵士たちの墓はモンドヴィの墓よりもきちんと保存されていた。僕のなかで、地中海が2つの世界を分けていた。ひとつは一定の空間のなかで記憶と名前が保存されている世界であり、もうひとつは広大な空間のなかで、砂嵐が人間の足跡を消してしまう世界であった。ジャックは匿名性と、無知で執拗な貧困生活を抜け出そうと努力してきた。単刀直入で、差し迫ったもの以外には何の計画もない、盲目的な忍耐の領域で生きることはできなかった。[861]

「スーヴニール・フランセ」[753]²⁰⁾が管理している父の墓には名前と日付の刻印があるのに対し、モンドヴィの墓は文字も読めなくなっている。本来ならば「彼＝ジャック」と書かれるべきところを、カミュは我知らず「僕^{ぼく}」と筆をすべらせている。この二重性はジャックだけでなく作家自身のものでもあるのだ。

ここで対比されている2つの世界とは、地中海の北側の世界（フランス・ヨーロッパ）と南側の世界（アルジェリア・アフリカ）である。対比は風景描写にも認められる。すでに見たように、『最初の人間』のアルジェリアは、壮大な時間的・空間的広がりのある、限界や境界線のない茫漠たる土地である。それに対し第1部第2章の冒頭で、パリからサン＝ブリューへと向かう列車から見えるフランスの風景は「数世紀来、最後の一平方メートルまで耕された畑や牧場」[751]である。時間と空間が限定され、目印がつけられ、構造化されるヨーロッパにおいてこそ、はじめて名前と記憶が保存され、歴史や伝統が形成されていくのだ。

そして小説において「歴史」を「非歴史」へと引き寄せる求心力となっているのが、現在時に生きる家族の中心に位置する「歴史を知らない」母親である。リセに入学したジャックは、本国フランスの雰囲気をもとうディディエに「エキゾチスム」[867]を感じ、「言葉と歴史の世界」に惹かれてゆく。彼の未来は貧しい家族との生活ではなく、リセにあったのだ。追想のなかで主人公の成長

とともに増大する日付の数もまた、「歴史を知らない」母との距離が拡大していくことを暗示している。ところが、物語の現在時における40歳のジャックは、アルジェリアの母のもとへと戻る。フランスという「歴史」の世界から「歴史」のない家族とアルジェリアの世界へ帰還するのだ——「ジャックはうとうとしていた。アルジェと下町の貧しい小さな家を再訪することを思うと、ある幸福な不安に胸が締めつけられた。パリを離れてアフリカへと向かう時はいつもそうだった。漠とした喜びをおぼえ、心が広々とした感じがし、楽しい逃避に成功し、監視人たちの顔を思い出して笑う人間の満足感があつた」[763-764]。父の探索の果てにジャックは「父の不在」を認識するが、それはすなわち「母の再発見」を意味しているのである²¹⁾。

『最初の人間』は母への回帰の物語であり、最後に息子ジャックは母に許しを請い、母はキリスト [925] や「無知なメイシュキン」[931] にも喩えられる聖なる者として描かれる予定であつた²²⁾。かつての「ウイとノンのあいだ」において、黙って椅子に座る母の情景が特権の瞬間として描かれていたことは本稿冒頭で述べたが、『最初の人間』でもほぼ同じ母の姿——椅子に座って通りを眺める母の姿——が描かれる。だが両作品には決定的な違いがある。『最初の人間』における母の行動は、「ウイとノンのあいだ」とは異なり、30年間変化なく繰り返されているもののだ。「人生の半分」[799] を通りを眺めることに費やしているとまで書かれる不変的な母の情景は、時間の流れとともに成長・変化する主人公と好対照をなしている。また物語の現在時においては実家周辺の情景も変化し、たとえばアパートの一階にある床屋の所有者はスペイン人からイタリア人になつてきている [772/774]。なによりも、近所のカフェでは爆弾テロが起こり、街にはパラシュート部隊が巡回している。時の流れとともに政治情勢が変わつたのだ。フランスに一緒に行こうというジャックの提案を拒否する母は、テロの脅威に晒されながらも住み慣れた界隈を離れたがらず、同じ質素なアパートに住み、変わらぬ表情で通りを眺め続けるのである。

松本陽正も指摘するように、『裏と表』において母を形容する「無関心」という言葉は、ジャックの母に使用されることはない²³⁾。初期の自伝的作品で言及される母の「無関心」とは、単なる「関心がない」ことを意味するのではなく、息子が見出した世界の真実のあり方でもあつた。同様に、『最初の人間』における母も、真理を体現する者として存在する。だがジャックの母はかつての『裏

と表』の母のように「無関心」を示しはしない。ジャックの母が聖なる者として描かれ、ジャックが通りを眺める母の姿に「神秘」[845]を見いだすのは、母が歴史のなかにいながらも、時間や歴史性に左右されることのない不変的な存在だからである。第1次世界大戦を経験し、アルジェリア独立戦争にも巻き込まれたジャックの母は、たしかに歴史的存在ではある。だが同時に、「無言の諦め」[788]によって数々の不幸と毎日の労働を耐え、最小限の生活で満足し、常に変わらぬ様子で通りを眺める母は、時間の変化に侵されない、「歴史」を超えた「非歴史的」な存在でもあるのだ。ここでカミュが『反抗の人間』(1951)において、キリスト教的・マルクス主義的な「歴史」に対して、古代ギリシャ的な、歴史性に左右されない不変なる人間の本性を想定したことを思い起こそう。この「不変性」という真理を母は体現しているのである。「補遺」の覚書がそのことを裏付ける——「おお母よ、おお優しい、いとし子よ、私の時代より偉大で、あなたを屈服させる歴史より偉大な母よ、わたしがこの世で愛したすべてのものよりも真実である母よ、あなたの真実の暗闇の前から逃げてしまった息子をゆるしておくれ」[920]。

かくしてカミュは「歴史を知らない」母の眼差しによって「歴史」の論理を相対化し、「通りを見つめる母」というモチーフを導入することで「非歴史的」な不変性を、変化する「歴史」と対峙させる。父の探索は「父の不在」で終り、個人の生は先祖へと結びつかず、様々な歴史的事件が描かれながらも歴史の連続性は切斷され、循環史観への道筋が開かれる。『最初の人間』は、「歴史」の権能を相対化する小説として成立しているのだ。

註

- *）本稿は平成22年、京都大学大学院文学研究科に提出した学位請求論文『アルベール・カミュにおける歴史認識の問題』の第4部に若干の修正を施したものである。
- 1）カミュの著作からの引用は、新ブレイアッド版カミュ全集に依拠した。Albert CAMUS, *Œuvres complètes*, édition publiée sous la direction de Jacqueline LÉVI-VALENSI (t. I et II) et de Raymonde GAY-CROSIER (t. III et IV), Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., 2006-08. 引用の出典は、第4巻についてはページ数のみを、他の巻については巻数とページ数を〔 〕に入れ本文中に示す。

- 2) この初期作品とは、1933年に書かれた自伝的エッセー「貧民街病院」,「貧民街の声」, および1934年から36年にかけて執筆された未完の自伝的小説「ルイ・ランジャール」を指す。これらのテキストは、新プレイアッド版では『裏と表』の補遺として収録されている。
- 3) 高塚浩由樹「ルイ・ランジャールと『最初の人間』の間の往復運動——アルベール・カミュの円環の行程と母親への告白」,『国際関係研究』28巻4号, 日本大学国際関係学部国際関係研究所, 2008年, 248頁参照。高塚氏の論文では触れられていないが,「『裏と表』をふたたび書く」という長年の願望が『最初の人間』によって結実したとする解釈にかんしては, カミュが『裏と表』の形式的不備に拘り, それゆえ再刊を拒んできた事実も考慮しなくてはならない。『裏と表』の初版出版とほぼ同時期に, 創作ノートである『手帖』に書き付けられた序文の草稿 [II, 815], および1937年7月8日付けの友人ジャン・ド・メゾンスール宛の手紙で, カミュは作品の形式的不備に対する不満を告白している [I, 97]。カミュが『裏と表』を元来エッセー集ではなく「芸術的作品」, すなわち小説として完成させる意図を持っていたことは, 未完の小説「ルイ・ランジャール」執筆の試みが示している。カミュは以前に書きためた短い自伝的エッセーをまとめて小説に昇華させようとしたのだが不首尾に終わったため, ひとまずエッセー集『裏と表』として刊行したのである。それゆえ,「『裏と表』をふたたび書く」という言葉は, あくまでも「小説として書く」ことであり, その長年の願望が『最初の人間』として結実するはずだったのである。
- 4) Agnès SPIQUEL, «Le Premier Homme - cent-trente ans de l'histoire de l'Algérie», in *Albert Camus 22: Camus et l'Histoire*, Paris: Lettres modernes Minard, 2009, p. 110.
- 5) Jacqueline LÉVI-VALENSI, *Albert Camus ou la naissance d'un romancier*, Paris: Gallimard, 2006, p. 314.
- 6) 初期の自伝的エッセーに登場する「母」と「叔父」は, ともに言語能力が欠如した人物として描かれている。「母」にかんしては,『裏と表』では,「不具で, ものがうまく考えられなかった」としか書かれていないが [I, 44 / 49]「ルイ・ランジャール」では「耳が聞こえず, 3つ以上の文を話すことができず, とりわけ少しものを考えることができず, 完全な文盲であるこの女」[I, 92] であると書かれている。また「叔父」にかんしては,「皮肉」(『裏と表』収録)においては単に啞者であるという記述しかないが [I, 44], それ以前に書かれた「貧民街の声」では, 啞者であるということに加えて耳の不自由さについて言及されている [I, 81]。
- 7) 母の数少ない証言によると, 孤児院で育ったジャックの父は, もともととは非識字者であったが, 後に仕事先で読み書きを習ったらしい [777]。だが父が残した文書も, 戦地から母に宛てて書いた短い葉書が数通あるのみである。
- 8) 第1部の最後でも, アルジェリアは「砂と海に囲まれたこの巨大な島」[860] と記されている。これに関して付言すれば,「アルジェリア」の名はアラビア語の「アル・ジャザイル (島々)」に由来している。

- 9) ダニエルのマルヌの戦いにかんする話は、『幸福な死』における、メルソーの友人エマニュエルが語るマルヌの戦いの経験とほぼ同じ内容である [I, 110-111]。
- 10) 平野千果子の『フランス植民地主義の歴史——奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』（人文書院，2000年，185頁）によると，5千人を超えるアルザス住民が，ドイツの占領を拒否してアルジェリアに移住したという。そのためアルジェリアは「小さなフランス」「新しいアルザス」と呼ばれ，フランスの延長線上の土地として本格的に位置付けられるようになったという。
- 11) Voir Simone de BEAUVOIR, *La Force des choses*, t. I, Paris: Gallimard, coll. «Folio», 2002, p. 182; Roland BARTHES, «*La Peste*, Annales d'une épidémie ou roman de la solitude?», *Club*, février 1955, repris in *Œuvres complètes*, t. I: Livres, textes, entretiens, 1942-1961, Paris: Éd. du Seuil, 2002, pp. 540-545. 特に『ペスト』の歴史記述をめぐるバルトとカミュの論争にかんしては，拙論「バルト＝カミュ論争再考——『ペスト』における歴史記述の問題をめぐる——」，『ステラ』第29号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2010年，45-58頁を参照。
- 12) 別の箇所では，母の時間認識を説明した以下のような記述もある——「彼女にとって，それはいつも同じ時であり，そこから不幸がひっきりなしに，警告もなしに飛び出してくるのだった」[779]。
- 13) Roland BARTHES, *op. cit.*, p. 541.
- 14) Roland BARTHES, «Réponse de Roland Barthes à Albert Camus», *Club*, avril 1955, repris in *Œuvres complètes*, t. I, *op. cit.*, p. 573.
- 15) 1830年に開始されたアルジェリア征服は，47年のアブド・カーディルの降伏をもって完了する。翌年に制定された憲法によって，はじめてアルジェリアは本土フランスの一部であることが宣言され，沿岸地帯に3県（アルジェ県，オラン県，コンスタンティーヌ県）が設置される。「フランス領アルジェリア」のはじまりである。
- 16) このことは，第1次世界大戦についての記述にも当てはまる——「アフリカの軍隊は，ただ多彩色の蠟人形のように戦火に溶けていった。そして毎日，アルジェリアのいたるところで，何百ものアラブ人やフランス人の孤児が生まれた。父のいない息子や娘たちは，その後，教訓や遺産もなしに生きる術を学ばねばならなかった」[782]。じっさい，小説にはジャックの母親以外にも多くの戦争未亡人が登場する。ジャックの親友ピエールの母だけでなく [825]，祖母の2人の娘 [795]，そして祖母の姉であるジャンヌ大叔母の3人の娘が戦争未亡人であることに言及されている [821]。
- 17) 『裏と表』収録の「ウイとノンのあいだ」の冒頭で，カミュはブルーストの「見出された時」からの一節を引用し，過去の回想にブルースト的な意味合いを重ねようとしている [I, 47]。
- 18) Harutoshi INADA, «*Le Premier homme*, roman ou autobiographie?», *Études camusiennes*, n° 2, 1996, p. 86.
- 19) 「補遺」には，小説の時間秩序にかんする2つの相反する意向がそれぞれ記されている

る [941 / 953]。

- 20) 「スーヴニール・フランセ」とは、1887年にドイツ占領下にあったアルザス・ロレーヌで創設された協会で、現在ではパリに本拠地を置く。この協会は「祖国フランス」のために戦死した兵士たちの記憶の保存と管理、後世への継承を使命としている。
- 21) 『手帖』には、以下のような覚書が1953年に書かれている——「おお、父よ！僕は夢中で自分に欠けていたこの父親を求めてきた。しかし今になって僕はずっと手にしていたもの、つまり僕の母とその沈黙を発見したのだ」[1174]。
- 22) だが一方で、「他人の汚れた下着と油まみれの食べ残しに囲まれた、男っ気もなく、慰めのない人生」[775]を送っていたと語られる母は、この世で最も不幸でみじめな存在であることも忘れてはならない。貧困と労働からなる生活というだけならば、母だけでなく家族全員、そして貧民街の人々にも当てはまるし、アラブ人やモール人、スペイン人の浮浪者といった、貧困家庭のゴミを漁る人々もいる [825]。母の悲惨さは、その徹底的な無知に由来する——「最も恵まれない人でさえも教えてもらうようなことさえも学ぶこともできずに、無言の諄めを余儀なくされたからだ」[788]。
- 23) 松本陽正『アルベール・カミュの遺稿 *Le Premier homme* 研究』、駿河台出版社、1999年、108頁参照。